

むのさん逝く

たいまつの火は消えず

101歳のジャーナリスト、

戦場の現実を伝えた。

この時、むのさんは「新聞の

争が始まったのは23時58分58秒

むのたけじさんが、昨日、亡くなつた。

よりよい社会と世界を目指すには、あの戦争と、その後の日本

に座つたむのさんは、強い風に白髪をなびかせながら、張りのある声で、「若い方々に申し上げたい」と語り始めた。

本の歩みを、絶えず検証し、発言し続けなければならない。

むのさんは、そのことを身をもって示しながら、戦後71年の日々を生きた。

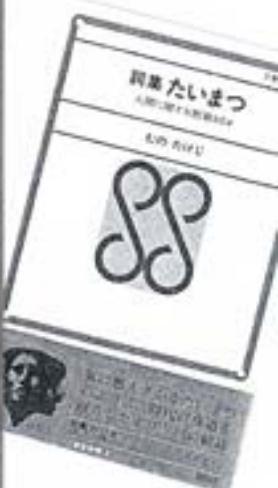
戦争中、朝日新聞の記者だったむのさんは、戦地などを取材した。だが、真実を伝えることができなかつた。その自責の念から、敗戦の日に新聞社を去つた。30歳だった。

故郷の秋田県に戻り、48年に週刊新聞「たいまつ」を創刊。地方を拠点に反戦、平和、民主主義を守る執筆と運動を続け、農業、教育などを論じた。いまや戦後生まれが人口の8割以上を占める。そこに向けて

むのさんは、戦時下の空気と、戦場の現実を伝えた。公の場での最後の発言となつた今年5月の憲法集会。車椅子に座つたむのさんは、強い風に白髪をなびかせながら、張りのある声で、「若い方々に申し上げたい」と語り始めた。

「戦場では従軍記者も兵士と同じ心境になる。それは、死にたくなければ相手を殺せ。正気を保てるのは、せいぜい3日。それからは道徳観が崩れ、女性に乱暴をしたり、物を盗んだり、証拠を消すために火をつけたりする。こういう戦争で社会の正義が実現できるでしょうか。人間の幸福が実現できるでしょうか。できるわけありません。だからこそ、戦争は決して許されない。それを私たち古い世代は許してしまった」

体験に基づく証言の迫力と悔悟の言葉に、数万の参加者が聴き入つた。



99歳一日一日



天声人語

人類史を1日にたとえれば戦争が始まったのは23時58分58秒から。それ以前はずっと戦争などなかった。全人類が本気になりさえすれば、戦争は必ず絶滅できる▼そう訴えて101歳まで走り続けたジャーナリストむのたけじ(本名・武野武治)さんが亡くなつた。戦争の愚や人生の妙を縦横に論じ、味わい深い箴言を残した▼「終点にはな

るだけゆっくり遅く着く。それが人生の旅」「死ぬ時そこが生涯のてっぺん」。1日長く生きれば1日何か感じられる。老いをくよくよ嘆かず、人生を楽しもうと呼びかけた▼終戦を迎えた日、自身の戦争責任をとりたいと朝日新聞社を退社した。反骨のジャーナリストと慕われたが、「反骨はジャーナリズムの基本性質だ」と原点を見失いがちな後輩たちを戒めた▼戦中の新聞社であからさまな検閲や弾圧などが見なかつた、危ういのは報道や強調などが見なかつた。危ういのは報道側の自主規制だと指摘した。「権力と問題を起こすまないと自分たちの原稿に自分が見つけられてしまう。検閲よりはるかに有害だった」。彼の残した言葉の良薬は

昨今とりわけ口に苦い。お前は萎縮してないかと筆者も胸に手を当てる▼「ボロを旗として」「定本雪と足と」「希望は絶望のど真ん中に」。著作を貫く一徹さは特筆に値する。沸き立つときも沈むときも集団に流されやすい日本社会で、揺れのないその言葉は何よりも頼もしかつた。ふるさと秋田で30年筆をふるつた新聞「たいまつ」の名そのままに、戦争絶滅の願いに全身を燃やし続けた。